

## サムエル記下 1 章 1～27 節

2025 年 6 月 18 日(水)

はじめに

本日からサムエル記下の学びに入ります。今日のわたしたちはサムエル記上と下というように分けています。こうした区分は、紀元前 3 世紀にヘブライ語聖書をギリシア語聖書に翻訳したときから行われました。当時、イスラエルの地を支配していたプトレマイオス朝エジプトが、アレクイサンドリアの大図書館に聖書をいれるようにと要請したためでした。翻訳作業は、70 人の律法学者によってなされたので、「セプトゥアギンタ=LXX=70 人訳ギリシア語聖書」と呼ばれます。

サムエル記上と下が一続きの書であるのは、内容からいってもよく分かることです。本日学ぶ、サムエル記下は、サムエル記上 31 章で語られたサウル王の討ち死にとイスラエル軍の敗北の記事の続きになっています。

そこでサムエル記下全体をみてみましょう。サムエル記下は 1 章～8 章までがダビデによる王国の確立に至る記事です。そこではダビデがユダの王となったこと、さらに全イスラエルの王となったことが語られていきます。

9 章～20 章までがダビデの宮廷生活と反乱の記事になっています。ここは、サウルの遺児でありその子孫に対する優遇、バト・シェバをめぐるダビデが引き起こした事件とその影響が語られます。さらに長男アブサロムの反乱、シェバの反乱が語られます。そして 21 章～24 章までがエピローグとなっています。以下に箇条書きにします。

1. 1～8 章ダビデの王国の確立
2. 9～20 章ダビデ王の宮廷生活と反乱
3. 21～24 章エピローグ

## I サムエル記下 1 章 1～27 節の話の流れ。

次に本日のサムエル記下 1 章 1～27 節を見てみましょう。まず 1 章 1～16 節では、ツィクラグにいるダビデのもとへ、あるアマレク人がやって来て、サウル王が討ち死にしたことを知らせます。しかしこの者は、処刑されてしまいます。

そして 17～27 節は、「ダビデはサウルとその子ヨナタンを悼む「弓」と題する歌を詠んだ」といわれ、その哀悼の詩がしるされています。

ですから 1 章は、箇条書きにすると、以下のようになっています。

1. 1 章 1～16 節 ダビデ、イスラエル軍の敗北とサウル王の死去を知る
2. 1 章 17～27 節 哀悼歌「弓」

## II. サムエル記下 1 章 1～27 節の解説

### 【1 節】

ここは「サウルが死んだ後のことである」から始まっています。わたしたち読者は、すでにサウル王が討ち死にしたことを知っていますが、ダビデたちはまだそのことを知りません。

「ダビデはアマレク人を討ってツィクラグに帰り、二日過ごした」とあります。ダビデたちがツィクラグに戻ると、町や焼け落ち、女たちは奪い去られていました。アマレク人の略奪隊の仕業です。そのことにショックを受けたものの、ダビデたちは失意の中から立ち上がり、アマレク人の略奪隊を討伐し、奪われた女性たちを解放し連れ戻すことに成功しました。そしてツィクラグの町

に戻ったわけです。ですから町はまだ焼け落ちたままであり、辺りには火事の臭いが漂っていました。しかし女たちも戻り、日常生活の復旧が始まっていたと思われます。ですからダビデたちは、北のギルボア山の付近でおこなわれたイスラエル軍とペリシテ軍の戦いが、どうなったのかはまだ知りませんでした。

#### 【2～4 節】

すると三日目に、「サウルの陣営から一人の男がたどりついた。衣服は裂け、頭に土をかぶっていた」というのです。敗残兵と思われる男がやって来たのです。彼は「ダビデの前に出ると、地にひれ伏して礼をした」わけです。おそらくダビデの部下たちが、この男をダビデの前に連れてきたのでしょう。男は、ダビデに対して敵意は全く無く、むしろ敬っていることを示すために、ちゃんと礼をしたのです。

そこでダビデが尋ねます。お前は「どこから来たのだ。」そのようにいっています。お前は何者かという問いを「どこから来たのか」といったわけです。そこで男は次のように語るのです。「イスラエルの陣営から逃れて参りました」といっています。さらにダビデに戦況を尋ねられると、「兵士は戦場から逃げ去り、多くの兵士が倒れて死にました。サウル王と王子のヨナタンも亡くなりました。」そのように報告しました。ここでダビデは、対ペリシテ戦で、イスラエルが敗北したこと、さらにサウルと息子ヨナタンも討ち死にしたことを、初めて知ったわけです。

#### 【6～10 節】

しかしダビデは、この報告に驚き悲しむ気持ちを抑えて、なおこの男＝若者に尋ねます。というのは敗戦のため多くの兵士が逃げたというのなら、どうしてこの男はサウルとヨナタンの死を知ることができたのか。その点を尋ねたわけです。ダビデは、彼の報告を鵜呑みにしていないのです。伝聞情報は、昔も今も、しばしば人を罠に陥れることがあるからです。

そこでこの若者は答えます。以下、箇条書きにします。

- ② わたしはたまたまギルボア山にいた。
- ② サウル王が槍にもたれかかっているのを見た。
- ③ ペリシテ軍の戦車と騎兵が、王に迫っていた。
- ④ サウル王は振り返って、わたしを見て、呼んだ。
- ⑤ サウル王は、お前は何者だと聞いたので、わたしはアマレクの者だと答えた。
- ⑥ サウル王は、わたしに、「そばに来て、とどめを刺してくれ。痙攣が起こったが死にきれない」と言った。
- ⑦ わたしは、サウルの側に行き、とどめを刺した。サウルは倒れてしまい、もはや生き延びることはできないと思ったからだ。
- ⑧ わたしは、サウルがかぶっていた王冠と腕輪を取った。

こうしてこの若者は、ダビデにサウルの王冠と腕輪を献上したわけです。

この若者は、ダビデがサウル王に追撃されていたことを知っていました。ダビデが 600 名の兵たちを連れて南ユダ地方を逃げ回っていたことは、目立つことだからです。したがってダビデにとって、サウル王は敵であると思ったとしても不思議ではありません。ですから敵であるサウルが死んだことをダビデに知らせることは良いことであり、何らかの褒美を得られることだと思っていたと考えられます。

そこで改めてこの若者の報告をみると、サムエル記上 31 章 1～6 節の記事と幾つかの点で違っていることが分かります。

③について。

サウル王を追撃したのは、ペリシテ軍の戦車と騎兵ではなく、射手たちである。ギルボア山の山上には戦車で追撃するのは、その地形によるが、不自然である。戦車は平地でこそ実力を発揮するものだからである。サウルが「深手を負って」とありましたが、それは射手たちが放った矢がサウルに刺さっていたためと思われる。しかしこの若者の報告には、それが欠けている。

②と④～⑧について。

サウルは一人ではなく、従卒がいた。サウルは、その従卒に剣で殺してくれるように頼んだ。この時、サウルが槍にもたれかかっていたのかどうか、定かではない。従卒は、王の命令とはいえ、主が油注がれた王を殺すことを非常に恐れ、それが出来なかった。そこでサウルは、自ら剣を取り、その上に倒れ伏した。つまり自害したわけであって、他の者に自殺幫助してもらったわけではない。しかしこの若者の報告には、以上のようなことは語られず、自分がサウル王に頼まれて殺害したと述べている。

ペリシテ軍は、戦いの翌日、戦死者からはぎ取ろうとしてやって来た。彼らはサウル王の首を切り落とし、武具を奪った。そのとき、王冠と腕輪はなかった。もしもそれらがあれば、ペリシテ軍はそれをはぎ取り、戦利品としてダゴンの神殿に奉納したであろう。

したがってダビデに報告した若者は、ペリシテ軍がやって来る前に、サウルから王冠と腕輪を奪ったと思われる。

このようにサムエル記上 31 章と比べると、以上の違いがあるわけです。

#### 【11～12 節】

ともかくダビデと兵たちは、このアマレクの若者の報告を聞くと、喜んだのではなく「**衣をつかんで引き裂き**」悲しみを表しました。そしてサウルとその子ヨナタン、さらに主の民とイスラエルの家を悼んで泣き、夕暮れまで断食しました。

その間、報告したアマレクの若者は、いわば放置されています。つまり彼もまた喪に服したといった記事はないのです。

#### 【13～14 節】

そこでダビデは、改めて知らせをもたらした若者に、どこの出身かと尋ねました。彼は、「**わたしは寄留のアマレク人の子です**」と答えました。するとダビデは「**主が油を注がれた方を、恐れもせずに手につかき、殺害するとは何事か**」と言いました。

ダビデはサウル王については「主が油注がれた方」とであると信じればこそ、主の裁きに委ね、これまでずっと逃げ回ってきたわけです。しかしこの若者はそのようなことを斟酌せず、サウルを手につかき殺害しわけです。

サウルが瀕死であるなら、ペリシテ軍の手から匿い、その最後を見取る事もあり得たわけです。しかしこの若者はそのようにしませんでした。こうしてサウルを世俗の王と同じように扱い、彼を殺害したのです。しかも彼は、そのようにすれば、ダビデの好意を得ることができると思ったようなのです。おそらく彼は、サウル王が自害した後、ペリシテ軍が戦死者からはぎとる前に、王冠と腕輪を奪い、ダビデにもってきたのでしょう。そのようにしてイスラエルの民の中で「寄留のアマ

レク人の子」であるという肩身の狭い立場から逃れることができると思ったのではないのでしょうか。

ですからここでは、ダビデが首尾一貫してサウルを主が油注がれた者であると信じているのに対して、この若者は、世俗の王として見つめ、自分の利益にかなうように行動したといえます。

#### 【15～16 節】

こうしてダビデは、この若者を処罰したわけです。理由は主が油注がれた者サウルを殺害したためです。このようにしてダビデは、自分たちがサウルを主が油注がれた王であると認め続けたことを証明しているのです。

#### 【17～27 節】

さらにまたダビデは、サウルとその子ヨナタンを悼む詩を作りました。ダビデにとっては、その若い日に、悪霊に苦しめられるサウル王のために、豎琴を使って歌で慰めてきました。ですからここでダビデが悲しみの詩を歌うのは、何か政治的な思惑を含んだわざとらしい事ではありません。なお、このダビデの詩は「ヤシャルの書」に納められているとあります。これは、ヨシュア記 10 章 13 節にも見られます。「ヤシャルの書」とは、当時の詩歌集であった、といわれています。以下でこの詩をみていきます。

19 節。「麗しき者」とは、サウル王を指しています。「高い丘」はギルボア山を指しています。

20 節。サウルの死を、敵であるペリシテの町ガトやアシュケロンに告知させるな、と歌います。敵が喜び、サウル王を嘲ることのないためです。

21 節。戦場となったギルボア山について歌っています。そこにはイスラエル兵の遺体と壊れた武器が散乱しています。

「サウルの盾が油も塗られずに見捨てられている」とは、当時の盾は、木製であり、表面を革で覆っていました。そして油を塗ったのです。矢や剣が滑ってダメージを与えないようにしたといわれます。

22 節。「ヨナタンの弓」と「サウルの剣」は、彼らの武勇を思い起こしてほめたたえています。

23 節。サウル王と息子ヨナタンを思い起こして歌っています。ダビデとヨナタンは深い友情で結ばれていました。しかしまたサウルとヨナタンは親子として愛し合っていたわけです。

24 節。ダビデはイスラエルの娘たちに、サウルの死を嘆き悲しむようにと歌うのです。サウル王のお陰で、紅の衣や金の飾に象徴される繁栄を与えられたからです。

25～26 節。ダビデは最後にヨナタンを勇士と呼び、彼との友情を思い起こしています。「女の愛にまさる」とは、具体的に、女性が戦場で共に戦うことがないのに対して、ヨナタンはダビデと共に戦場で戦いました。助けたり助けられたりと、呼吸がピッタリと合っていたのでしょう。ただし、男の友情と「女の愛」は比較すべきものというよりも、種類が違うというべきではないのでしょうか。

27 節。結びの嘆きとなっています。

以上のようにサムエル記下は、ダビデが、サウルを殺害した者を退け、さらにこのようにサウルの死を心から嘆いたことを明確に語っています。

それによって、ダビデが世俗の王のように、サウルの死をチャンスと見て王位を狙うようなことはしていないことを明言しているのです。ダビデにとって王となることは、ただ主なる神が導き

与えてくださるものだからです。